

発掘調査の概要

藤原宮外周帯の調査(飛鳥藤原第191次)

2017年1月から2月まで、水路改修にともなって全長137mもの細長い調査区を設定し、発掘調査を実施しました。調査地は、南面大垣外濠と六条大路の間にある外周帯と呼ばれる空閑地にあたります。

調査区は水路による削平が著しく、残念ながら古代の遺構面が残存しない部分がほとんどでした。かろうじて調査区西部で、古代の東西溝を2条検出しました。2つの溝は重複しており、下層の溝は、幅1m程度の流路と考えられます。埋土からは、藤原宮造営期の土器や藤原宮の瓦が多く出土しました。上層の溝は、南肩を検出し、幅1.2m以上、深さ20cmで、溝は東に向かって北に振れ、調査区中央よりやや西で調査区外となります。上層の溝は、南面大垣外濠と位置が合致することから、外濠か外濠埋め立て後の落ち込み等の可能性も考えられます。

宮造営前の遺構としては、調査区東部で検出した古墳時代の土坑から、吉備型甕と呼ばれる特徴的な甕が出土しました。そのほか、4条検出した自然流路のうち、3条が旧地形に沿って斜行していました。

本調査は、遺構の残存状態は良好ではありませんでしたが、水路の削平を免れた遺構から、藤原宮南辺の様相の一端を知ることができました。また古墳時代以前の旧地形や土地利用を考えるうえでも参考になる成果を得られたと考えています。

(都城発掘調査部 石田 由紀子)



調査区西半全景(西から)